

研究テーマ

当院における認知関連行動アセスメント（CBA）を用いた
職種間の評価差異とFIMとの関係について

病 院 名

医療法人社団健育会 石巻健育会病院

演 者

○伊藤^{いとう もえ}萌（言語聴覚士） 高橋聡美（言語聴覚士） 岩渕聖也（言語聴覚士）
奥田龍三（言語聴覚士） 藤原由茉（言語聴覚士）
伊東貴広（理学療法士） 荻原久佳（理学療法士）

概 要

【研究背景】

高次脳機能障害は捉えにくく評価に難渋しやすい。簡便に行え、多職種での情報共有にも有効とされる1) 認知関連行動アセスメント（以下CBA）が開発されている。当院での導入を考えているがいくつか課題が考えられた。

【研究目的】

①CBA評価の職種間差異②入院時CBAと退院時FIMの関係性③退院時FIMに影響するCBA下位項目について調査しCBAが予後予測に活用できるか検証する。

【研究方法】

平成30年6～12月に当院回復期に入院し、退院・転棟した脳血管障害21名とした。年齢は50～87歳（平均74歳）であった。評価は入院2週間以内・退院時の2回、担当PT・OT・STが実施。職種間の信頼性検討の為PT・OT・STのCBA合計点の級内相関係数（intraclass Correlation：以下ICC）（2，1）を入院時と退院時で算出した。また入院時CBAと退院時FIM総得点についてSpearmanの順位相関係数を算出した。更に退院時FIM総得点を従属変数、入院時CBA各下位項目、年齢、性別、在院日数を独立変数としてステップワイズ（変数増減法）重回帰分析を行った。統計解析はR（2，8，1）を用い、有意水準は5%とした。尚、本研究は対象者全てに説明を行い当院倫理委員会の了承を得ている。

【結果】

入院時CBAのICC（2，1）はOT・ST間0.91（95%CI：0.75～0.96）、PT・ST間0.91（95%CI：0.80～0.96）と高く、退院時CBAのICC（2，1）はOT・ST間0.94（95%CI：0.87～0.97）とより高くなった。Spearmanの順位相関係数は0.78（ $p<0.01$ ）であった。重回帰分析の結果、退院時FIMに影響を及ぼす項目として記憶が算出された（偏回帰係数：21.696、標準化回帰係数：0.819、 $t=6.230$ 、 $p<0.01$ 、 $R^2=0.671$ ）

【考察】

先行研究同様CBAには職種間に高い検者間信頼性を認め、更に入院時に比べ退院時で相関が高くなった事からCBAは習熟する事でより高い信頼性が期待できる事が示唆された。また、入院時CBAは退院時FIMに影響がある事、CBA下位項目の記憶が退院時FIMに影響している事が確認された。入院時CBAの記憶に着目する事は予後予測に有用であると推察された。これは経験の積み重ねの記憶が運動学習に影響していると考えられる。しかしADL阻害因子として意識障害や注意障害などが挙げられ、記憶以外の要因も否定できない。本研究は母数が少ない為継続して検証する必要がある。またCBAを共通言語としチーム内でADLの予後予測等を議論する事で円滑なチームアプローチの一助となると考える。

【結論】

CBAは職種に関係なく当院においても活用でき、下位項目である記憶が退院時FIMに影響する事が示唆された。

【引用文献】

- 1) 森田秋子ら（2014）．認知機能を行動から評価するための「認知関連行動アセスメント」の開発．総合リハビリテーション42（9），877-884.
- 2) 菱川法和ら（2017）．回復期脳卒中患者に対する認知関連行動アセスメントの評価者間信頼性の検討．愛知県理学療法学会誌．29（2）
- 3) 森田秋子（編）（2016）．日常生活から高次脳機能障害を理解する認知関連行動アセスメント 三輪書店
- 4) 高嶺一雄（2005）．脳血管障害患者における転倒・転落の危険因子：特に高次脳機能障害との関連性について．北関東医学．55（1）